

技術・実践

早期母子接触実施率向上への取り組み

盛岡赤十字病院 産婦人科病棟

讃岐 綾子

【はじめに】

早期母子接触Skin to skin contact, Birth Kangaroo Care (以下SSCとする)はWHOで提唱されており日本周産期・新生児学会を始めとする「早期母子接触実施の留意点」において母乳栄養率の向上や母子の相互関係の確立などに対する効果が表記され推進されている。

A病院産科病棟ではSSC実施率向上を目指しチーム目標にも掲げ取り組んでいる。しかし、2018年度のSSC率は5.0%であり、これは厚生労働省の2014年全国施設で協力を得られた施設のデータ81.1%と比較し低率であった。

そこでSSCを実施できない原因や理由についての詳細をアンケート調査した。その内容を活かして勉強会の開催やマニュアルを作成し、知識と意識の統一を図り取り組んでいくことでSSC実施率を向上し、より質の高い助産ケアを提供していきたいと考えた。

【研究目的】

SSCを実施できない原因や理由を明確にし、SSC実施率を向上することができる

【方 法】

1. 研究対象者

産科病棟分娩室全スタッフ13名

2. 研究期間

2018年10月1日～10月31日

3. 研究方法

- 1) SSC実施率が向上しない問題点について問題発見プロセスProblem Discovery Process (以下PDPとする)を活用してスタッフカンファランスを8月に実施した
- 2) 9月1日～9月10日スタッフへのアンケート調査を実施した
- 3) ドクターカンファランスで縫合中からSSC実施してよいか医師へ確認した
- 4) SSCについて勉強会を実施した
- 5) SSC実施基準・マニュアル作成し分娩室へ掲示した
- 6) 妊婦への同意書を作成し外来で配布、入院時に回収し意思の確認した
- 7) 1ヶ月間のSSC実施率を集計し評価した
- 8) SSC実施率の結果を申し送りで発表し、分娩室の休憩室に掲示した

4. 倫理的配慮

研究の目的・方法について説明し、研究への協力は任意であり、研究参加の中止・拒否が可能なこと、不参加でも不利益が生じないこと、個人が特定されないことを紙面で説明し承諾を得た。

【結 果】

PDPを用いたスタッフカンファランスでSSCが向上しない理由としては「新生児死亡の事故報告があ

るため安全性が確保できれば取り組める」, 「知識不足やマニュアルがないため自信がなく消極的になってしまう」等があった。

取り組み前のアンケートの回収率は100%であった。SSCを実施しなかった理由・できなかった理由(複数回答)として「多忙であった」「希望がなかった」が10名(76.9%), 「早く帰室させなければならなかった」「縫合等の処置に時間を要した」が8名(61.5%), 「基準に合わなかった」が6名(46.2%), 「人員が不足していた」が5名(38.5%), 「早く仕事を終わらせたかった」は0名であった。SSCを実施した理由・実施できた時の理由(複数回答)は「希望があった」「時間や人員に余裕があった」が11名(84.6%), 「愛着形成を促すため」が8名(61.5%), 「縫合などの処置がなかった, 短時間で終わった」「基準を満たしていた」が5名(38.5%)で「必要性を感じているから」が4名(30.8%), 「母乳栄養率を上げるため」は2名(15.4%), 「児の体温, 呼吸, 血糖値などの安定のため」が1名(7.7%), 「その他」が1名(7.7%)で行うことになっているから, 決まっているからであった。

ドクターカンファランスにおいて縫合中からのSSC実施について医師へ確認し許可を得ることができた。

調査期間1ヶ月間の全分娩件数は47件, 自然分娩28件, 帝王切開19件であった。自然分娩28件のうちSSC実施数は14件で実施率は50%であった。SSCが実施できなかったのは14件であり内訳は同意書なしが5件, 適応外5件, 多忙で実施できなかったが3件, 産婦の希望がなかったが1件であった。

【考 察】

アンケート調査ではスタッフ全員がSSCの必要性を感じており早く仕事を終わらせたいは0名で意識が低いわけではなかったことが分かった。

実施できなかった理由で縫合等の処置に時間を要したことが上位にあげられていたため, 医師の許可が得られて縫合中から実施可能となったことは実施率向上へ大きく影響し, 医師との連携の重要性を再

認識することができた。

PDPを活用したスタッフカンファランスにおいて知識不足やマニュアルがないことがあげられていたため, 勉強会を実施したことは知識の統一が図れたと同時に安全面への不安の軽減と意識の変化につながったと考える。またマニュアルを作成し体制を整えられたことは日々の看護・助産実践に活用でき実施率の向上につながったと考える。

今回産婦への同意書を作成したことは, 妊婦自身がバースプランとして自分のお産を考える事となり, よりよいお産にするために主体性への働きかけになったと考える。

今後も産婦が自らの出産に満足感を得られ, 母子の相互関係の促進になり得るようよりよい助産ケアの提供に日々研鑽していく必要があると考える。

【結 論】

スタッフに向けたSSCの勉強会や基準・マニュアル作成は, SSCについて再認識しSSC実施を標準化するために有効であった。

実施できなかった理由に縫合等の処置に時間を要することが上位にあげられていたため, 医師の許可が得られて縫合中からSSCが可能となったことはSSC実施率向上に有効であった。

SSC実施率が向上したことは一連の取り組みが有効であったと考える。

(本論文の要旨は2020年10月31日第13回岩手看護学会学術集会で発表した)

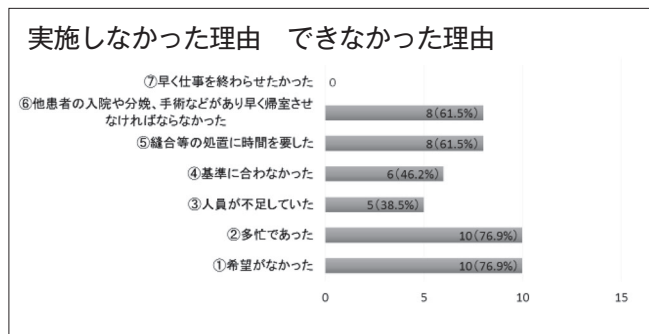
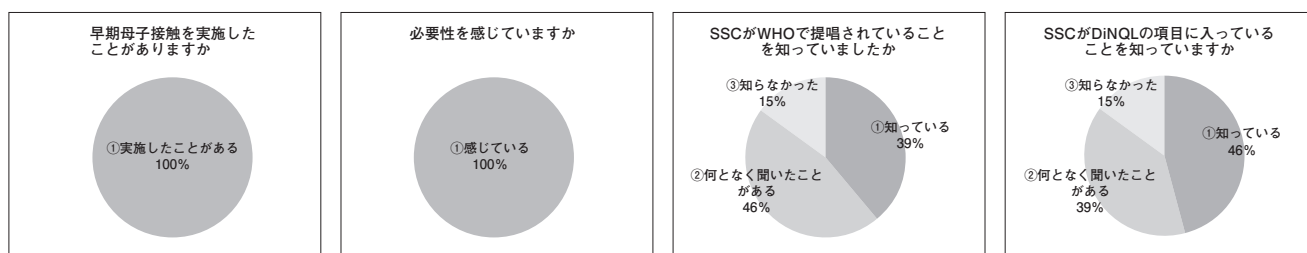
文 献

- 1) 日本周産期・新生児医学会他: 「早期母子接触」実施の留意点, 2012.
- 2) カンガルーケア・ガイドラインワーキンググループ: 根拠と総意に基づくカンガルーケア・ガイドライン, 2010.
- 3) WHO/UNICEF: 母乳育児成功のための10のステップ, 2018.

- 4) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課：早期新生児期における早期母子接触及び栄養管理状況，2015.
- 5) 「授乳・離乳の支援ガイド」改訂に関する研究会 五十嵐隆 他：授乳・離乳の支援ガイド，2019.
- 6) 鈴木俊治：出産直後に行う「カンガルーケア」について，2012.

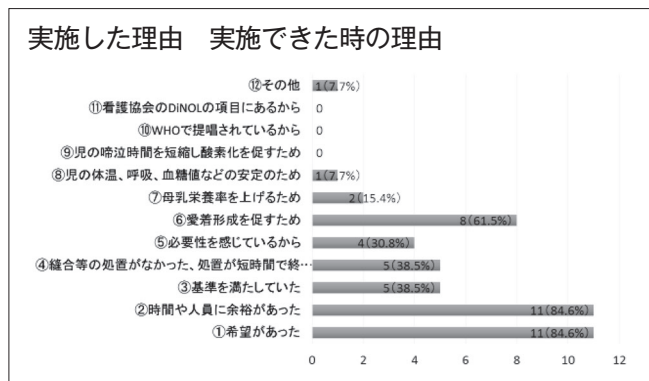
事前アンケート結果

回収率100%



前年度と研究期間中のSSC実施数と実施率の比較

	2018年 1月1日～12月31日	2019年 10月1日～10月31日
分娩件数	793	47
経膈分娩	394	28
帝王切開	389 (49.1%)	19 (39%)
早期母子接触実施数	20	14
早期母子接触実施率 (自然分娩のみ)	5.0%	50%



SSC実施数と実施率6ヶ月間の結果

	2018年 10月	2019年 11月	2019年 12月	2020年 1月	2020年 2月	2020年 3月
分娩件数	793件	48	56	38	47	57
経膈分娩	375件	28	36	23	15	28
CS	362件	19	20	15	32	29
CS率	49.4%	39%	35%	39.5%	68%	50.8%
SSC数	20件	14	18	12	11	18
SSC (DINQL)	2.5%	29%	32%	31.5%	23.4%	20.7%
SSC実施率	5.0%	50%	50%	52.2%	73.3%	64.3%
2時間以内母乳支援数	225件	22	20	15	11	22
2時間以内母乳支援率	63%	79%	56%	65.2%	73.3%	78.6%

